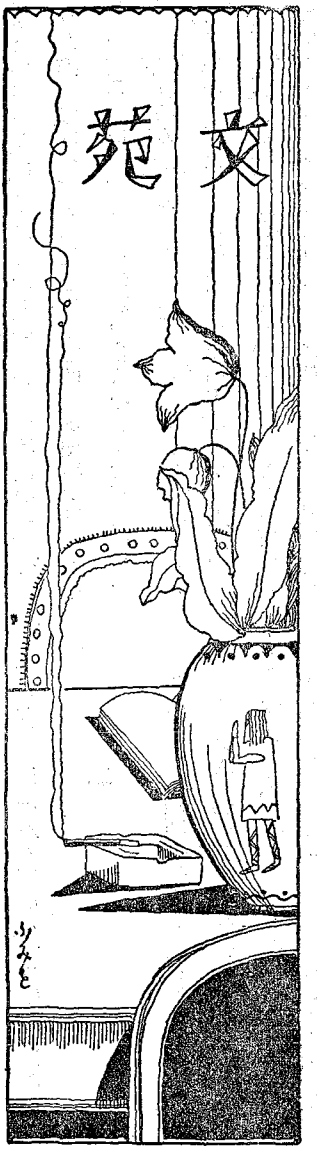

三つの古道

田山花袋

一

伊賀の上野から大和の長谷に出る道を歩いた時ほど往昔の街道といふ空氣を味つたことはなかつた。今は汽車が中途まで出來て、自動車が名張と長谷との間を定期的に駛つてゐるので、昔の感じなどはすつかりなくなつて了つたであらうが、それでも搜せばまだいくらか奈良朝や平安朝あたりの氣分が殘つてゐないこともあるまい。第一、あの間

は山の靡きからして大和に似てゐるのでのんびりしてゐる。昔の人が好きであつたらうと思はれる。

奈良朝時代には、山背がまだ開かれなかつたから、この道路が東國への主要街道を成してゐたであらうといふことは點頭かれる。それは壬申の亂乃至その以前を見てもわかる。天武天皇が大海皇子であつた時、その時分は大津にその都を持つてゐた弘仁天皇の政府がそれを壓迫したので、吉野から遁げ出して伊勢に走る時、この街道を徒歩でお通りになつた。そしてやつと大野に來て向うから來る百姓の馬を徵發してそれにお乘りになつた。その大野の位置が今でもはつきりと指點されるから面白い。半ばは山に凭つたやうな道。昔は谷であつたらうと思はれる田畠が下に深く穿たれてゐる形なども、その時のさまを思はせるに十分である。私はある時、そこを通つて、その時分のさまをいろいろに思ひ浮べたことを今でも思ひ出すことが出來た。

壬申の亂は從つてこの道路を閑却しては十分に理解することは出來ぬであらうと私には思はれる。この伊賀盆地―

つづいてあの甲賀、信樂の山の中、聖武天皇の離宮か何かが今日でもあの萬山の奥である信樂の山の中に殘つてゐたりする形から考へて、あそこいらは昔はかなりに開けたところで、その以前には、戰爭の上に於ても、非常に重要な地點であつたらうと思はれる。壬申の亂の攻防に於ても、兩軍は互ひにこの山の中を奪ふことについてその全力を擧げてゐるのがはつきりと想像出來る。

その時大海皇子が伊賀から伊勢に行き、それから美濃に行つて、不破關を背後に東國をその儘自から壟斷した形は、戰略の上から見ても非常に面白い。戰はずして既に大津宮軍はその敗勢を示してゐるやうに私には思はれる。

二

この昔の東國街道の重く見られたことは、空海がその隱居所として室生を選んだ形を見ても、略々それと想像することが出來る。もはやその時は山背の平安朝が開けて、奈良の都も全く廢址になり、大和は何方かと言へば衰頽に傾

いてゐたであらうが、しかもその道路はまた來往が多く、全く世離れた形になつてゐなかつたので、それであまりにさびしくなくまたあまりに賑かでないその室生がその寶庫として一面またその隱居所として選ばるることになつたのではあるまいか。そしてその室生はさういふ地勢であつたがため、女人高野として一時流行をきはめた形があるのではあるまいか。長谷の觀音あたりまでやつて來た女達もそこまで入つて行くを面倒ではしなかつたのであるまいか。

大和の萩原から松山あたり、あそこいらも日本の歷史の最初の頁あたりによく出て來るところであるが、あの神武天皇の入つて來た道も、道路としてもつと深く研究されて然るべきであると思ふ。人事は變つても自然は變らない。山はいつまで經つても同じく、それを通つた路筋などもひとり手にそれを指さゝれる。歷史家に由つては、神武天皇の紀伊から入つて來た路筋は、紀の川流域だとしてゐるものもあるけれども、普通には新宮あたりから山を越して入つて來たやうに言つてゐるものが多い。丹敷戸畔（にしきとべ）の根據地が南伊勢にあつたことなどを考へると、何うしてもその路は木の本から北山川の谷を溯つて、祖母谷から吉野へと出て行く東熊野街道であつたであらうといふことがそれと點頭かれるのである。そしてその山路をあの八咫烏が導を成して深く入つて行つたのである。

しかもこの道路は今では全く來往を絕つてゐる。誰にきいても、そこを通つたといふものを知らない。吉野から紀州に山越しに入つて行くものでも、大抵は十津川乃至金峰山を通つて、この路を通らない。そのくせ、この路は九十九折を成してゐる北山川（瀞八町の上流）に添つてゐて、そこに世にも稀なる溪潭がひろげられてゐるのである。

三

その次に鎌倉街道が私にはなつかしい。京都から琵琶湖の東岸を掠めて、半ばは今の汽車の幹線に添つてゐるが、そこに平宗盛墓があつたり、野州川があつたり、蒲生野があつたり、九十九院があつたりするのであるが、全くそれ

が田舍蕭條とした光景の中に埋められて了つてゐるのはさびしい。ここに、彦根以東は全く山の中になつて了つてゐるので、一層荒涼としてゐる。しかし曾てはそこは往昔の唯一の東國街道であつて、京都と鎌倉との間の交通は非常に賑かさをきはめたものであつたに相違なかつたのである。そして今通つて見ると、さうした形は少しもないのである。全く榛莽の中に埋もれつくして了つてゐるのである。しかし仔細に探つて見ると、その榛莽の中に例の六波羅探題の北條仲時の墓とそれに殉死した六百人の武士の墓とがあつたり、南朝の源具行の斬られたあとが依然として墓になつて殘つてゐたりするのであつた。苦しみを抱いて去り、喜びを抱いて來る。軍馬の嘶く音、物の具の觸れ合ふ音、時には山川もゞよもすばかりの大軍がこの道路を上方へのぼつて行つたこともあつたのであるのを思ふと、深い感慨に打たれずにはゐられない。そしてこの街道は室町時代に至つて次第に衰へ、後には中仙道の一部になつて了つたが、古いだけに、何處となく昔の空氣が殘つてゐて、その時分のさまが歴々と眼の前に髣髴するのを覺えるのである。山のなびき具合や、道の折れ曲つてゐる形や、をりをり前に大きな伊吹山を眺むる形などが私の心を惹かさずにはゐないのである。

そしてそれをもつと細かく入つて行つて眺めると、時代が幾時代となくその道路の上に埋却されて行つてゐるのが、それをはつきり指さされるのである。天武天皇の行宮址、それから不破關址、關の藤川、鶯の瀧、或は俗說かも知れないが常盤御前の墓、つゞいて源具行墓、六百人の墓、さうした址の中にはつきりと千二百年以上の歴史の起伏が重り合つてゐるのを見るのである。普通旅客が汽車の窓から眺めて通るこの間の山と川と、そこには夕日が當つたり、農夫が田を耕してゐたり、秋ならば、こころごころの山嶺が紅葉して、田家の庭には紅い柿の實が鈴生に熟してゐたりするのである。